慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハンス・ヘニー・ヤーンのメデア劇について
Sub Title	Hans Henny Jahnns Medea
Author	沼崎, 雅行(Numazaki, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.24, (1967. 12) ,p.43- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00240001-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハンス・ヘニー・ヤーンのメデア劇について

沼崎雅行

ハンス・ヘニイ・ヤーン Hans Henny Jahnn（一八九四年―一九五九年）は多才な人だった。[1] したがって劇作家としてのヤーンがヤーンのすべてでないことは言うまでもない。しかしすでに十四、五才のころ（一九〇八年）から戯曲の創作を志し、一生涯この志を貫いたことから推して、劇作が彼の創造活動の中心であったことはほぼまちがいなかろう。数多くの習作は別として、少なくとも十二編の戯曲を残しているから、決して寡作とは言えない。[2] にもかかわらず、人びとに愛好され再三上演された作品となると、きわめて少ないことは残念ながら事実である。一見エロ・グロに似た特異な言葉とショッキングな場面が人びとの耳目をひくことはあっても、ヤーンの真意はなかなか理解されなかったようである。

そのなかで比較的好評をもって迎えられたものが、古代ギリシヤに伝わる奸婦メデア（ギリシヤ風にいえばメデイア）の伝説を扱った悲劇「メデア」Medea（一九二六年初演）である。母親が愛児を殺すというその異常な内容ゆえに、メデア伝説は後世の芸術家たちの創作意欲をかきたてたことにおいて、ギリシヤ伝説中の白眉とも言うべきものである。

コルキスの神殿の中に竜に守られてある宝物・黄金羊皮を、ギリシヤ人イアソン（ドイツ流にはヤーゾン）が奪いかえしにきたが、見付けられて追かけられる。コルキスの乙女メディアはイアソンに惚れたあまり、故郷を捨て、弟を殺してイアソンを援ける。そんなことがあってふたりは夫婦とな

り、二児をもうけるが、数年にしてイアソンはメデイアを避け、一家が身を寄せているコリントの王クレオンの娘に心を寄せるようになる。メデイアはイアソンに裏切られて気も狂わんばかりにいきどおる。ふたりの間はいまや破局に直面している。クレオンは娘の結婚の邪魔になるメデイアに国外退去を命ずる。メデイアは自分を裏切ったイアソンへの復讐として二つのことを計画する。まず、これまでとは打って変った恭順な態度で自分の非を詫び、詫びのしるしとして王と王女にヴェールと冠を贈る。しかしそれは魔法の品々であって、それを身につけるやいなや、ふたりは死ぬ。つぎに、メデイアは夫イアソンを苦しめるために、ふたりの愛児をわが手にかけて殺す。かけつけたイアソンにメデイアは冷やかな訣別の言葉を投げかけ、愛児のなきがらを竜車にのせて走り去る。

この伝説を最初に創作の題材にとったのはおそらくエウリピデスであり、彼の悲劇「メデイア」はそれ以降のすべての「メデイア」創作の規範となっている。なかんずく、メデイアが愛児を殺すというもっとも根幹をなす行為は、もともと伝説にはなくエウリピデスの創作であるということが定説となっているほどである。(3) この伝説を最大の規模をもって劇化した人が、オーストリアの劇作家フランツ・グリルパルツァーであった。彼はメデアの悲劇が生まれるまでのすべての過程を「黄金羊皮」Das goldene Vließ という題名の三部作として総括し、文明と野蛮の確執としてとらえた。また、もっとも新しい劇化の試みは、ジャン・アヌイによってなされた（一九四六年）。アヌイはメデア伝説の枠を借りて現代人の女性心理を描いた。

ヤーンの「メデア」劇はアヌイについで新しい試みであるが、形態的にはむしろギリシャ悲劇に近い。と言うよりも、明らかにこれを模していると考えられるふしがある。劇の進行する場所が終始変らず、コリントのヤーゾン家の広間にとられていること。劇の進行を区切る幕がなく、主要人物の登退場によっておのずから場面に区切りがつけられていること。あたかもギリシャ悲劇のコロスのように場面と場面をつなぐコーラスがあること。全体が韻文形式（大部分が Blankvers）でつらぬかれており、ヤーンのただひとつの韻文劇であること。これらの事実を考え合わせると、ヤーンがギリシャ古典悲劇、ことにエウリピデスの「メデイア」を念頭に置いてこの作品を書いたことは疑い得ない。しかるにヤーン自身はエウリピデスとの類似性を強く否定している。(4) これはどういうことであろうか。私の推察するところでは、形態的には意識的にギリシャ悲劇を模しながら、メデア伝説の解釈の仕方でエウリピデスとはちがったものを打ち出そうとしたのにちがいない。その意味ではやはりヤーンもエウリピデスの影響下にあったと言えるだろう。エウリピデス

の『メデイア』との比較においてヤーンの『メデア』を見ることによって、もっとも明らかにその特徴があらわれるに相違ない。

ヤーンの「メデア」劇の最大の特徴は、女主人公メデアの設定のされ方にある。まず第一に、メデアは黒人として設定されている。この設定は私の知るかぎり他のどの「メデア」創作にも見当らないものである。ヤーンの独創と言ってよかろう。むろんメデアは蛮族の女でなければならない。なぜなら彼女は太陽神ヘリオスの子孫であり、かってコルキス島の神殿の巫女であったが、たまたまコルキスを襲ったギリシヤ人ヤーゾンと夫婦になり、ギリシヤ人と蛮人のカップルが出来あがった。そこに悲劇が胚胎しているからである。メデアが蛮族の女であることは悲劇の大前提である。エウリピデスはメデアの出身地コルキスを黒海沿岸に設定した。しかしヤーンはこれを地中海沿岸のアフリカに設定する。

KREON : Er sehnt nach Menschen sich, vor Tieren flieht er;
ist er doch Grieche und kein Afrikaner.

ヤーゾンは人間に憧がれ、けだものから逃げるのだ。
なにしろ彼はギリシヤ人であって、アフリカ人ではないからな。(S. 621)[5]

さらにヤーンはメデア伝説がきわめて強いエジプト的な響きをもっていることを指摘している。[6] 彼の見解によると、メデア伝説はエジプトのイシス・オシリスIsis-Osiris神話[7]と共通するところが多いという。その例として彼は、主人公が神の一族の出身であること、弟を八つ裂きにして殺したこと、の二点をあげるにとどめているが、後述するように、その他にも数多くの類似点がある。ヤーンは、ギリシヤに伝わったメデア伝説の源流はエジプトにあると考え、メデアの故郷をエジプトに設定した。さらにメデアを黒人と設定したことは、当時すでにエジプトでは白人と黒人の人種混合がひろく行なわれていたという歴史的事実をふまえているばかりでなく、メデアが単なる非ギリシヤ人でなく黒人であれば、ヤーゾンに棄てられる悲劇の動機がいっそう鮮明に浮かびあがるであろうという作劇上の理由もあったにちがいない。「自分自身の黒い身体を呪い」(S. 594)、クレオン王からは「お前の肌の色のように、お前の仕業も腹黒い」(S. 618) といわれのない非難を浴びせられ、ひとびとからさげすまれながらも、ひたすらヤーゾンの愛を求めるメデアの姿を見

るとき、われわれの眼底にこれとダブってもうひとつのイメージが浮びあがってくる。それは現代になお存在する人種偏見の事実である。作者自身、メデア悲劇で扱われた問題が現代では黒人、シナ人、マレー人にあてはまる、と言い、[8] 初演のころがちょうど人種的価値評価の傾向が強まりつつあった時期であることを思いあわせるならば、この劇のひとつの意図はおのずから明かであろう。ちなみに、ヤーンは人種混合については積極的な意見をもち、世界は将来混血児の優れた資質によって導かれると考える。[9]「メデア」のなかで殺される二人のこども（混血児）も単なる復讐の道具とはみなされておらず、半神半人の存在として「神がみとともに生きる」(S. 661) であろうとされている。しかしこの点についてはあとで触れよう。

第二にメデアは老い衰えた女として設定されている。これもまたヤーンの独創である。巫女としてコルキスの暗い神殿の中にいたころのメデアはまだ若かった。

MEDEA : .....darin Medea,
jung und schwarz, kaum Weib und doch
nicht Kind mehr, Dienst tat. Verschwenden durfte
sie sich, doch nicht lieben —.....

.....そこでメデアは、
黒い肌も若々しく、一人前の女とはいえないけれど、
もう少女ではない処女(おとめ)として、仕えていました。失恋することは許されても、
愛することは許されませんでした。（S. 638）

ところが、ヤーゾンが来たときメデアはその誓いを破ったのである(S. 638)。そして彼女はつぎのように言う。

MEDEA : Wär niemals dieser Mann
nach Kolchis vorgedrungen, in finstrer Halle,

jungfräulich noch lebt ich, tanzend
in schwarzer Siulenhalle, unuerweslich,
des Helios Sproß, mit meinem Bruder.

もしもこの男が
コルキスへ攻めて来なかったなら、
わたしはまだ処女のまま、暗い神殿のなかで
踊りながら、ヘリオスの子孫として、朽ることなく
弟とともに暮していたでしょう。(S. 662)

メデアはヘリオス神の子孫である。コルキスにいるときは神の一族として永遠に若さを失なうことがなかった。ところが彼女はある日掟を破って男への愛におちいった、永遠の若さの特権を投げうって。人間を愛することによってメデアは不老不死の神の一族の座から、老いて死すべき人間の境涯におちた。二児の母親となり、こどもたちにヘリオスゆずりの美貌を与え(S. 661)、みずからは醜い老女となった。夫ヤーゾンはこれに反し、メデアの魔術の力によっていつまでも老いることなく、永遠の若さが保たれている(S. 575)。老いたメデアは人間に負わされた運命を象徴するものである。しかしメデアはそのことに絶望しはしない。たとえ愛することによって神の一族の座を降り、永遠の若さ、永遠の生命を失なったとしても、自分の生命がわが子のなかに流れこんでいることを確信している。メデアは息子が結婚してこどもをつくることに、異常なまでの期待を寄せる。

MEDEA : In meinem Herzen prangte schon
das Bild der Hochzeitsnacht, dess' Wirklichkeit
sie schuldig blieb den Augen der
verratnen Fackelträgerin,

わたしの胸の中にははやくも
婚礼の夜の光景がはなばなしくひらき、
裏切られたたいまつ持ちの目の前に
婚礼の夜はそれを実現せねばならなかった。（S. 653）

MEDEA : Ihn—fackelhaltend—nackt
im Hochzeitsbett zu sehen, ihn zeugen sehn,
——たいまつを持ったまま——婚礼のベットにいる
息子を見、息子がこどもをつくるのを見るために、……（S. 660）

メデアは息子の結婚初夜に立ちあい、息子の生殖の営みを見届けることを無二の楽しみとしている。そこには老醜をかこつ姿はない。生命に対する怖ろしいほどの執念があるばかりである。

ヤーンはメデア伝説がバビロニヤのギルガメッシュ叙事詩と共通するものをもっていると主張する。[10] 粘土板に楔形文字で印されたものが発見され、十九世紀にようやく解読されて全貌があきらかとなったこの叙事詩は、古代ギリシヤの叙事詩「オデッセー」にも比すべき英雄物語であり、古代オリエント最大の文学作品である。

ウルクの王ギルガメッシュは暴君として怖れられている。住民の訴えをきいて女神は粘土でエンキドゥという野獣のような猛者をつくりあげる。ギルガメッシュとエンキドゥは壮烈な力競べをするが互いに譲らず、ついに引わけとなってふたりは大の仲良しとなる。彼らは力をあわせて森の悪者フンババを征伐し、愛の女神の横恋慕から送られた天の牛も殺してしまう。その罰としてエンキドゥは神がみから死を宣告される。親友の死を看とったギルガメッシュは自分も同じ運命をたどるであろうことを予期し、永遠の生命を得たいと心に誓う。不死の生命を得たといわれる聖王を、はるばる山野を越えて訪ねるが、聖王の答は彼を落胆させる。しかし永遠の若さの草が海底に生えていることを教えられて、ギルガメッシュは海にもぐる。首尾よく摘んだギルガメッシュはこれをもってウルクへ帰る。しかしその帰りみち、蛇にこの草を食べられてしまう。ギルガメッシュは永年の苦労がむくわれなかったことを深く嘆き悲しむ。

「三分の二は神、三分の一は人間」（一九ページ）[11] である英雄ギルガメッシュと、半神半人のメデアとの類似性は明らかである。とも

に超人的な能力をもちながら、半分あるいは三分の一だけ人間であるため、人間の運命に従って死ななければならない。しかし両者ともみずからの超人的能力を駆使してこの運命を克服しようとする。やっとその手がかりを得たギルガメッシュはどんなに喜んだだろう。

「ウルシヤナビ（船頭の名）よ、この草は特別な草だ
人間はこれでもって生命を新しくするのだ
私はこれをウルクの城へ持ち帰り
（中略）
私も食べて若かったころにもどるとしよう」（一二五ページ）

だがギルガメッシュの喜びはたちまちにして裏切られ、ギルガメッシュは悲しみに打ちひしがれる。

草はギルガメッシュにとって生命の根源であり、メデアにとっては黄金羊皮が生命の根源であると考えられる。そして両者とも奪われてしまう。ギルガメッシュは草を奪われることによって失望するが、メデアはどうか？　黄金羊皮が奪われるということは、実はメデアが誓いを破って人間を愛するということと同じことである。なぜなら、メデアがヤーゾンを援けてはじめて黄金羊皮は奪い去られたのだから。メデアがヤーゾンを愛さなかったら、黄金羊皮は奪われなかっただろう。だがメデアは傲岸なくらい愛しつづける。愛することによって失なったものを、愛することのなかに再発見しようとする。メデアはヤーゾンを愛することによって、たとえ自分の肉体は衰え滅びようとも、子を通じ、孫を通じて永遠の生命の持続が保証されると信ずる。「愛することのなかに永遠の生命の持続がある」――これはヤーンの全創作に共通する彼の根本理念である。なかんずくヤーン畢生の大作である長編小説三部作「岸辺なき流れ」(Fluß ohne Ufer) はこの理念の壮大な実現にほかならない。

ところがメデアのこの期待は、ヤーゾンによってめちゃめちゃに壊されてしまうことになる。ヤーゾンがメデアを棄てて結婚しようとするコリントの王女は、実はメデアの息子が結婚を望んでいる相手でもあったのだ。(このように二人のこどもの年令を高く設定し、

徹極的に筋につながりをもたせたのも、ヤーンの独創である。)夫への愛を裏切られたうえ息子の嫁まで横取りされて、生命の持続の可能性を奪われたメデアは激怒する。ギルガメッシュは不老長寿の薬を蛇に喰われたとき深く悲しんだ。「そこでギルガメッシュは坐って泣いた/彼の頬を伝って涙が流れた」(一二六ページ)。両者の性格の違いは明らかである。激怒したメデアは人間性を放棄し、魔女の性格をむき出しにする。ヤーゾンへの復讐に燃え、ヤーゾンを苦しめるためにクレオン王とその王女を、そしてふたりの子供を刺し殺す。しかしメデアはなおも傲岸な態度を変えない。父親として死顔を見てやりたいと必死に懇願するヤーゾンをつきはなして、メデアはこう言う。

MEDEA: Mein sind die Kinder jetzt!
Der Leib ist mein, denn seine Schönheit
hab ich Helios abgetrotzt.
Tot nur ist Jasons Samen. Der Knaben Bildung
lebt als Gott mit Göttern.

子供たちはいまは私のものよ!
子供たちの身体は私のもの、なぜって
その美しさはヘリオスお祖父さまからむりやりもらったんですもの。
死んだのはヤーゾンの種(たね)だけよ。子供たちの形(ビルドゥング)は
神がみといっしょに神として生きるのです。(S. 661)

子供を刺し殺したのは単なる復讐のためではない。子供のなかに流れている血の半分、ヤーゾンから受けついだ人間の血を洗い流すことに意味があるのだ。「子供たちはもうあなたのものではない」と言い放ってヤーゾンに一指も触れさせず子供たちの遺体を運び去る。どこへ? それはヘリオスの統べる神々の世界にちがいない。メデアは愛児を殺すことによって人間界を離れたのだ。

永遠の生命を伝える希望の綱をみずからの手で絶ち切ったメデアは、絶望しただろうか。否である。神話（ミュトス）の世界は広いのだ。愛は生命を持続させる、と前に述べたが、この愛を狭い意味に解してはならない。男女間の愛のほかに、同性愛も兄妹（あるいは姉弟）愛Geschwisterliebeも神話（ミュトス）の世界では正常な愛としてみとめられるのだ。同性愛、兄妹（姉弟）愛が大胆にとりあげられていることから、ヤーンを「性的倒錯者」とか「姦淫の予言者」とか呼ぶ批評家があるが、神話（ミュトス）の世界と現実をとり違えた妄言といわなければならない。さて、「メデア」にもそれらの愛の片鱗が見られる。メデアのふたりの息子のあいだに愛情のもつれがあることを見のがすことはできない。ふたりは性格的にまったく対照的な兄弟として描かれており、そのちがい方は男女のそれに酷似している。しかもふたりの心をつなぐ糸が切れかかっている状態は、ヤーゾンとメデアの関係を思わせる。いわばヤーゾンとメデアの関係の投影像ともいうべきもので、明かにヤーンはその効果をねらって書いたものだ。兄のほうは年とともに、いや年令以上に早く成熟し、弟のほうはいつまでたっても成長しない。兄の愛を求める弟はついにはつぎのような言葉すら口走る。

DER JÜNGERE BRUDER : Du darfst mich töten, wenn du mich nur liebst.

ぼくを愛してくれさえしたら、兄さん、ぼくを殺してもいいよ（S. 629）

さらに兄妹（姉弟）愛の糸は複雑にもつれあっている。メデアは長子をより一層いつくしむが、それは彼が彼女の弟に生きうつしだからなのだ。

MEDEA : .....Des Bruders Bildnis,
des fernen Toten, verzwiefacht,
stark und schwach, halbreif und reif,
lag vor mir.

弟の姿が、遙かかなたに遠ざかった
死者の姿が、二重うつしになって、

あるいは強くあるいは弱く、あるいは成熟しあるいは半成熟のまま、
わたしの眼の前に横たわっていました。(S. 660)

長子のことを語りながら、いつも弟を思いうかべているメデアなのだ。彼女は弟を殺した。しかし彼女は彼を愛していた。あるときメデアは長子を指さしてこう口走る。

MEDEA : Auf ihn schaut! Meines Bruders Leib!
Ihm gleicht mein Kind. In meinem Schoß
wuchs er, ihm gleich, mein Sohn. Kaum weiß ich, ob
von Jason ich empfangen habe den Erstgeborenen.

あの子をごらんなさい！私の弟の身体つきそのままよ！
あの子は彼にそっくり。わたしの胎内で
彼にそっくりのわたしの息子が育った。わたしにもほとんどわからない、
はじめて生まれたあの子の種をヤーゾンから受けとったのかどうか。(S. 641)

長子はヤーゾンの種ではなく、弟の種かもしれないことをほのめかす。これはメデアと弟とのあいだに、イシス・オシリス神話にみられる双子関係があてはめられたものにほかならない。ヤーンによると、イシス・オシリス神話では「男神と女神は双子としてすでに母の胎内にあるときから、結びついて生殖を行なっていた。」(S. 736) このような胎内における双子の同種交配が続けば、神の血筋は永遠に絶えることがない、というわけである。この神話が信じられた結果、古代エジプト王朝では兄妹結婚がしばしば行なわれた。永遠の生命についてのこのようなエジプト的観念が、メデアの思考を支配していると解釈できるであろう。

弟を八つ裂きにしたり、不都合な報せをもたらしたクレオン王の使者の眼をくりぬいたりするメデアの残忍性は、二児の殺害において頂点に達する。しかしヤーンはこの残虐行為をただ単なる復讐行為とはみなさず、神話の世界にその裏づけを求めた。イシス・オシ

リス神話では、殺された神はその子孫に復讐者が生まれることによって復活するとされている。息子が弟と生きうつしであると感ずるとき、メデアの心の奥底にこの神話(ミュトス)が支配していなかっただろうか。殺された弟は息子のなかに蘇ったのだ、と。そして、死んだ二人の息子もいつかはまた蘇るにちがいないという気持から、遺体をたずさえて去るのである。死体保存はヤーンの好むモチーフであるが、それがこの古代エジプト的な観念に基ずくものであることはおそらく疑い得まい。

ヤーゾンにたいする二つの復讐計画を果したメデアは、三つ目の計画を実行する。王と王女、それにふたりの愛児の殺害は、ヤーゾンにとってたしかに苦痛きわまりないものであった。しかしそれはヤーゾン自身に直接加えられたものではない。ヤーゾン自身はいかなる害を受けたか。それは、若さに呪いをかけられたことである。

MEDEA : .....nicht Bettgenossen
sollen dein Begehren kühlen,
あなたの情欲をどんな同衾者も
静めることができないようにしてあげます。(S. 662)

永久に静められることのない情欲、それはまさに「無間地獄」である。永遠の若さを保つことが、まかりまちがえば地獄になる、という恐るべき認識をメデアは持った。永久に老いないということは必ずしも幸福を約束するものではない。同様に、永遠に生きるということがどれほどたいへんなことかも想像がつこう。死を怖れる召使たちにメデアは言う、「死ぬことはたやすいこと、生きることのほうがずっと難かしいのよ」(S. 665)

最後にメデアは白い牝馬にひかれた馬車で走り去る。あとに残された者たちは暗黒の中で揺らぐ大地とともに、沈黙の世界へと沈んでゆく。盲いた使者が言う。

DER BOTE : .....Gebrochne Augen,
gebrochene Münder, zwecklose Leiber,

zwecklos von nun an. Wir haben's reichlich.

……潰れた眼、

破れた口、役に立たない身体、

それらは今から無用になる。われわれは無用なものをたくさんもっているのだ。(S. 667)

メデアは限られた人間存在のなかに永遠の生命の可能性を求め、むなしく破れ去った。人間世界で破れて、神の世界に逃げもどった。あとに残った者の不安と絶望は、人間全体の不安と絶望でもあるのだ。人間の悲劇的な運命——それにもかかわらずヤーンは、より高きものの創造の流れを肯定する。彼はそれを神話(ミュトス)の形をかりて試みたのであった。しかしわれわれはここで、神話(ミュトス)に深く根ざしたこのメデア劇を作者ヤーン自身は現在的なものとして受けとってほしいと強く望んでいることを、もう一度想起すべきであろう。

ちなみに、「メデア」は一九二六年に出版され、その年の五月にベルリン国立劇場にて初演された。主演アグネス・シュトラウプ(メデア)、エルヴイン・ファーベル(ヤーゾン)、演出ユルゲン・フェーリング。

註1　ヤーンの才能は大別して技術的分野、文学的分野、学問的分野にわたっていた。第一の才能はオルガン製作に、第二のそれは小説戯曲の創作に、第三のそれは音楽理論、オルガン製作に関する研究、ホルモンの研究、馬の飼育法、楽譜の出版などに花ひらいた。

2　戯曲を発表年順に並べると、次のとおりである。

Pastor Ephraim Magnus, 1919
Die Krönung Richards Ⅲ, 1921
Der Arzt, sein Weib, sein Sohn, 1922
Hans Heinrich, 1924
Der gestohlene Gott, 1924
Medea, 1926
Neuer Lübecker Totentanz, 1931
Straßenecke, 1931
Armut, Reichtum, Mensch und Tier, 1948

Spur des dunklen Engels, 1952
Thomas Chatterton, 1955
Die Trümmer des Gewissens —Der staubige Regenbogen—, 1961

3 新関良三著 ギリシヤ・ローマ演劇史3「ヱウリピデス」四五八ページ参照。

4 Hans Henny Jahnn・Dramen I, S. 735 参照。

5 同右 S. 569～667, Medea の中から。

6 同右 S. 741 参照。

7 Isis（女神）とOsiris（男神）とは、地の神 Geb 天との女神 Nut の双子兄妹のあいだに生まれた、これまた双子の兄妹である。エジプト神話では神々は自己生殖あるいは兄妹間の生殖によって子孫をつないでゆく。Osiris は弟の Seth に殺され八つ裂きにされる。Isis はその死体の部分をあつめて蘇生させ、息子 Horus をもうける。Osiris が冥界の支配者として君臨する一方、Horus は成長して父の殺害者を打ちまかし、天界および地上界の王座につく。〔参考 Wörterbuch der Mythologie, hrsg. von H. W. Hassig (S. 315—406) : Die Mythologie der alten Ägypten, von W. Helck〕

8 Hans Henny Jahnn・Dramen I, S. 741 参照

9 同右。

10 同右。S. 735

11 矢野文夫訳「ギルガメッシュ叙事詩」山本書店。以後これにならう。